

追憶する老体の柳——《遊行柳》の季節はなぜ秋なのか

灘中学校高等学校教諭・能楽研究者 中嶋 謙昌

『遊行柳』は、『船弁慶』『紅葉狩』などの作者として知られる、観世小次郎信光最晩年の作品である。白河の閑付近にある朽木の柳の精が、遊行上人から回向を受けて成仏し、報謝の舞を見せる。舞台上には柳の作り物が置かれ、青々とした葉の印象も強い。「見渡せば桜をこきませて都ぞ春の錦なりける」(古今集・素性法師)という和歌があるよう、古典和歌の世界では、柳は春の景物として扱われることが多いのだが、『遊行柳』は秋の曲である。

現在、秋の柳を俳句などに詠むことは珍しくなく、「柳散る」という秋の季語もある。しかし、平安時代においては柳は春のものであった。少なくとも、古典和歌の龜鑑とされた八代集(『古今和歌集』から『新古今和歌集』に至る八つの勅撰和歌集)に、秋の柳を詠んだ歌は收められていない。大抵は春の柳で、夏の柳がわずかにはある程度である。何も考えなければ、柳は春である。

前場の初同(最初の地謡)では、「げにさぞな所から、人跡絶えて荒れ果つる、葎蓬生刈萱も、乱れ合ひたる浅茅生や、袖に朽ちにし秋の霜、露分け衣きて見れば、昔を残す古塚に、朽木の柳枝さびて、蔭踏む道は末もなく、風のみ渡る氣色かな」(「上ゲ歌」)と、秋の情景を描写する。「蔭踏む道」とは、「うち磨き春は來にけり青柳の蔭踏む道に人の

休らふ」(新古今集・藤原高遠)を踏まえた表現で、春の柳を詠んだ和歌が、わざわざ秋の描写に転用されている。

しかも、『遊行柳』の初演は、永正十一年(一五一四)三月、新黒谷での観世大夫勧進能の折であつたらしい(表章「作品研究『遊行柳』」、「能楽史新考」)。晚春三月初演の能であつたにもかかわらず、季節を秋に設定しているのは、信光の明確な意図によるものであろう。

なぜ信光は『遊行柳』に秋を選んだのだろうか。

秋の柳は漢詩に先例がある。唐の詩人白居易に「城柳宮槐漫搖落 愁悲不レ到貴人心」という詩句がある。「都の柳や宮中のえんじゅの葉が、秋風に吹き乱されて散つてしまつたが、秋の季節の悲しみは、今を時めく貴人の心には感じられないだろ」と解釈できようが、『和漢朗詠集』にも採られ、日本でも知られた句であつた。

平安時代が終わりを迎えると、和歌の世界でも、秋の柳がモチーフに選ばれるようになる。このころ、「村雨の雲吹きすさぶ夕風に一葉づつ散る玉の小柳」(順徳院)、「玉島や落ち来る鮎の川柳下葉うち散り秋風ぞ吹く」(藤原家隆)などの歌が詠まれているが、この新たな歌材を評価したのは、鎌倉期から南北朝期の京極派歌人であつた。

京極派とは、当時の歌壇の主流・二条派と対立した、和歌

の一派である。『玉葉和歌集』・『風雅和歌集』という二つの勅撰和歌集を編み、鋭い感覚の和歌を多数収めている。その点で二条派が撰んだ他の勅撰集とは一線を画している。秋の柳の歌は、玉葉集に一首、風雅集に十首見られ、ここでも二条派とは異なる独自の美意識が示されている。先の順徳院や藤原家隆の歌は、風雅集に収められているが、秋の柳は、他の勅撰集では新続古今集に一首収められるのみであつた。

室町時代に入つても、秋の柳、散る柳は、正徹や、心敬など、鋭敏な感覚を持つた歌人・連歌師たちによつて詠まれている。信光が具体的にどこから着想を得たのか、これだけでは判断できないが、秋の柳が当時としては平凡ならざるモノ一つであつたことを窺わせる。

いずれにせよ、秋の柳にはこのような文学史的背景があつたのだが、これだけでは、信光が『遊行柳』に秋を選んだことの説明としては不十分であろう。

おきたい。

『遊行柳』は同じく草木の精をシテとする老体の能、世阿弥作の『西行桜』を模倣したものと言われる。一時期は、「柳づくしだが、関連性のない故事を連らね」た「風流能の性格」の能と評価されることもあり（日本古典文学大系『謡曲集』など）、確かにそのような一面は否定できない。しかし、近年の研究では、「道のべの朽木の柳が過ぎ去った昔を偲ぶ」という和歌的連歌的発想を下敷きにした「新しい能」という評価もなされている（樹下文隆「遊行柳」の構想）。

〔能研究と評論〕一六）。

信光は、表面的な面白さを追求した風流能ばかりではなく、懐旧の情を文学的に描く、内容的にも奥行きのある作能も行っていた。このような近年の研究成果を踏まえると、老木の桜をそのまま春に描く『西行桜』とは異なる、新たな老体の能のあり方が、秋の柳を描く『遊行柳』で表現されたとも言えるのではないか。

本曲の後場は、華やかな柳の故事や詩句などを点綴した後に、秋風が「露も木の葉も散り散りに」吹き払い、後にはただ朽木の柳だけが残るという閑寂の景で終曲する。「柳桜」のように、春の景物として桜と一対で扱われることのある柳だが、柳が落葉する秋を「今」に設定することで、〈華やかなりし昔の春〉と〈衰えたる今の秋〉という時間的な対比が明確になる。樹下氏が主張する懐旧の主題も、これによって十分に効果を生んだはずだ。老体能の素材として、秋の柳を見出したところに、『遊行柳』の成功があつたと捉えておきたい。

信光は、春の桜をシテとする『西行桜』に対して、秋の柳をシテとする『遊行柳』を作つた。それはただ素材や季節を変えたというのではなく、追憶する老体にとって、より適した設定を見出したということなのだろう。古典和歌の類型的季節感から一歩踏み出すことで、新たな能を生み出す手法を、最晩年の信光は会得していたようである。